

●朔の夜が十五夜にして満月は二日となれば供物を変へる

河村郁子

「十月の月」とする一連の冒頭のうた。令和二年、陰暦では四月と五月の間に閏四月があったので、十五夜（陰暦八月十五日）が例年よりひと月遅れたという。その十五夜が十月一日。満月は十月二日だったので、この歌のようになった。機知でもあるが、供物を変えたというところ、面白い。

そういうこともあつてか、雲間の月、下弦の月、上弦の月などが前半（のうた）に配置され、後半はさらに火星、木星までもが配されて、みるものとして能舞台、また（慈照寺は）向月台にも及ぶ。さいご月面探査に触れ、抒情質を問う。全天、とりわけて秋の月。調子のよさからは、この歌、

今月はをりしも火星大接近 東に火星 西に木星

慈照寺の向月台やいかならむ 狭庭に出でて月光掬ふ

慈照寺は銀閣寺の正式名称。向月台はその庭園にあり、月に照らされたようにみえるという。仕草にも優美なところがある。

●赤まんまうねりつつ延ぶ獣道

新野祐子

赤まんま（犬蓼）で、秋の季語。赤まんま、でも素朴、普通、見慣れたもの、というような説明を読んだ。雑草だが、丈低い、記憶の中でも赤い小さな花が鮮やか。花や果実を赤飯に見立てて、別名が赤（の）ま（ん）ま。懐かしいものでもある。

けものみち自体がうねっているのだろう。起承がわからないようなところ。みちをなぞるように、赤まんまが延びている、という。雑草の丈夫さもある。これはけものみちとのとりあわせだが。みたままで、強度のある表現になっている。好きな句。

落鮎の阿修羅のごとき水知れり

落鮎は、産卵後、川を下りつつ死んでゆく鮎のこと。下り鮎くだとも。また背に鉄錆のような淡い斑紋を生じるところから、錆鮎ともいう。興福寺の阿修羅像では、肉身部と裙くんで、もとは鮮やかな朱色だったという。ここでは水が錆色に染まってみえたということか。句には、ある種切なさがある。

●キクイモの歌うたひたる叔母なりき徳丸ヶ原に分け入るみつこ

布宮慈子

叔母は布宮みつこ。（生前唯一の）歌集に『紅』があり、手持ちのものをみると、集中一連に「キ

クイモの花」があった。こんな歌、初句は（高女）学徒動員の歌を残してもいるこの世代のものか。

・戦なき野に咲き誇るクイモのことしの花もしみじみ黄色

・わが宿の庭隅に咲くクイモのさいごの花は折り取らずけり

集中のⅢ（徳丸ヶ原）に収められた一連で、Ⅲはそれまでの豊島区から板橋区（徳丸）に転居して以降の歌を収録する。徳丸ヶ原は古地図に読んだ地名らしい。そこでのクイモ。ここではクイモを通して交錯するものがある。現在と過去でもある。

クイモの花を知らずに過ごしたる武蔵野台地をいまは思ふも

以前は、たしか武蔵野市にすんでいた。そこから、いまは思ふも。武蔵野台地と云っているとこ  
ろにも注目した。この歌にも。聞きてをりたり、声は直前の歌から「みつこの声」。

いつも吾に時間はなくて曖昧に聞きてをりたりああ上滑り

## 前号作品短評B 〈慈子〉

●マルちゃんにあうはひさびさ近所ではハルちゃんが話題にもなる

小野澤繁雄

マルちゃんとハルちゃんは動物であろう。これまでの作者の歌を読んだことがある人には、散歩の折に会う犬の名前だと見当がつく。犬についての話ができるほど、地元の人と触れ合い馴染んでいる作者像が浮かぶ。次も関連の歌。

犬の名をしるのみにして名を呼べばまさかにも飼主のよろこぶ

犬の名前は知っているが飼い主の名前は知らない。たまたま出くわした犬に呼びかけてみたら、飼い主が反応して喜んでいる。人間同士では難しくなる会話も、動物を介してのコミュニケーションは不思議とうまくいくものだ。そんな日常のひとつま。

渡り切ってはちまんはしと名をしりぬみちの一部が名をもつひとつ

うお座には魚が二匹はしらざりき複雑な歩道橋絵のみちびきに

ふだん何気なく歩いている道に注目した二首。こんなことあるね、と思わせる歌である。知って

いるようで知らないと気づく瞬間。無駄な力が入らない、作者独特の歌いぶりである。

●戦いの海に散りたる父遙か海の色せる竜胆<sup>りんとう</sup>供<sup>ども</sup>う

市川茂子

戦いの海というのは、第二次世界大戦時の南方の海を指すのではないだろうか。父親は、戦争ではるか遠い海の彼方に散ってしまった。遺骨はなく、父親のかすかな思い出も作者の心の中にあるだけだ。ちょうどリンドウが咲くころになると、父親を思い出す。リンドウの花は海の色だ。そのリンドウを生けることで作者の心は平穏になっていくのである。

コロナにて変る暮らしの様相に何もせぬまま過ぎる明け暮れ

路地の角カーブミラーは付けられて老いの姿を写して行き来す

コロナ禍をどう過ごせばいいかは誰にとっても大問題。そこを正直にうたっている。カーブミラーの歌は、どこかコミカルなものを感じさせる。道の角にカーブミラーが付けられた。奇妙に映るうえに、老いの姿をさらけ出す以外、ないではないか。まったくもって噴飯物だ。歌の裏側からは、そんな声が聞こえてきそうだ。やや意識しながら角を曲がる作者が見えてくる。

